ちょっと ブレイク しませんか？

第48回 リバー・ランズ・スルー・イット（1992年 米国）

イソップ寓話の「蟻とセンチコガネ」は、夏の盛り、蟻が畠を歩きまわって、冬の食糧を溜めこむために、小麦や大麦を集めていた。センチコガネはこれを見て、他の動物が仕事を止めてのんびりしている時に汗水流すとは、何ともしんどいことだと驚いた。蟻はこの時は黙っていたが、やがて冬になると、餌になる糞も雨に流され、飢えたセンチコガネが、食物を分けてもらおうと蟻の所へやって来た。それに対して蟻の言うには「センチコガネ君、私が汗水流すのをとやかく言ってくれたが、君もあの時苦労していたなら、今餌に困ることはなかろうに」。このように、ふんだんにある間に将来に備えない者は、時勢が変わればひどい不幸に見舞われるのだ。と記している。

20世紀初頭の米国の田舎町で牧師の父親から基督（キリスト）教と釣りを伝授された二人の兄弟の物語が「リバー・ランズ・スルー・イット」だ。秀才の兄は名門大学に入るが、遊び好きの弟は地元の大学に通い釣りに凝る。6年後、卒業した兄が帰郷すると、いつの間には弟の釣りは達人の域になっていた。ある日、警察から連絡を受けた兄は、喧嘩で拘留された弟を迎えに行く。その際、警察から弟が賭場の常連でトラブルを起こしては何度か逮捕されたと知らされる。賭博に溺れる弟に兄は失望。兄はシカゴ大の英文科教授への採用決定の通知を受け、数日後、彼女から再会を望む手紙が届く。兄は彼女に会いシカゴ大への就職が決まったことを告げ、一緒にシカゴへ来てくれるように申し込む。兄は酒場まで弟に会いに行き、彼女への想いが真剣であることを語る。兄の恋の成就を祝して、二人は夜中まで上機嫌で酒を飲み交わす。酔った弟は兄を車で町外れの賭場へ連れて行く。弟が賭博客ともめ始めたため兄は弟を連れ帰ろうとするが叶わない。弟は兄を呼び止め、翌日に父親と三人で釣りに行く約束をする。当日、兄は弟の美しい釣り姿に看取れて、弟こそフライ・フィッシングの申し子だと感服する。シカゴへ発つ前日、父と弟と三人で釣りに出かけ、弟は大物を釣り上げる腕前を披露する。しばらくして兄は警察に呼び出される。なんと賭けのもめ事で殺されてしまった弟の遺体と対面するのだった。

それから長い長い年月が過ぎた。妻に先立たれた兄は年老いて故郷へ戻る。独り釣りを続けながら、何があっても絶えず流れ続ける川に万感の想いを寄せるのだった。

あくせく働く蟻の傍で無為に過ごして糞を食べるセンチコガネでは非教育的との判断なのか、螽斯（きりぎりす）がヴァイオリンを弾いて歌うと改変されたのは十六世紀頃らしい。イソップの教訓「備えあれば憂いなし」に異論はない。それは兎も角、真面目な兄が蟻、遊び人の弟は螽斯だが、レッドフォード監督は人生にはもっと大切なことがあると伝えようとした。移（うつ）ろい行く人生を川の流れに重ね合わせる兄の姿は、晩年の美空ひばりの歌に通じる。

春は社会人としての出発と終着が交錯する。新人は期待と不安が併存し、ベテランは一抹の寂しさとそれなりの安堵に耽る。ところで、自然と一体化し柵（しがらみ）から解放される釣りは一生の趣味。春・夏はフライ・フィッシングに最適だ。但し、ネット上で人を釣るのだけは止めて欲しい。

粥川（かゆかわ） 裕平（ゆうへい）
（精神科医・映画評論家）
名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長